



## 第 1 9 回定期委員会 「委員会宣言」

### 委員会宣言 (案)

J R 東労組横浜地本青年部は 9 月 2 6 日、神奈川労働文化センターホールにおいて第 1 9 回定期委員会を開催し、職場で不安に思う全ての仲間たちに寄り添う運動を実践していく方針のもと、「青年部の存在感を最大限発揮した運動づくり」を通じて、さらなる組織強化・拡大をかちとり、J R 東労組の未来を切り拓いていくことを確認した。

新型コロナウイルス感染症が国内で感染拡大が始まってから一年半以上が経過した。今この瞬間も、職場で感染対策を行い、見えない恐怖とたたかいながらも列車の安全運行のために尽力している仲間がいることに感謝するとともに、彼らのことを忘れてはならない。集まることに対して多くの考え方があるが、顔を突き合わせて話をしてお互いの悩みや実践を出し合える場、そしてなにより同じ仲間がいるということを実感してもらえる場をつくらうという考えのもと、感染対策を万全にして開催することにこだわってきた。

2 1 春闘は新型コロナウイルス感染症拡大による影響で、2 年連続で横浜地本主催の春闘総決起集会が中止になるなど、どのように青年部員とたたかいを一致させていくかが非常に難しいものとなった。結果は J R 東日本会社が会社発足以来初の通期で赤字に転落したことを理由に「ベアゼロ」のみならず「昇給係数 2」との回答が示され、会社発足後初めてとなる定期昇給がカットされる事態となった。また、当初昇給係数 2 は「東労組があったから 0 から 2 になった」とあたかも「成果」として打ち出してしまい、多くの組合員から「これは成果ではなく敗北だ」「押し付けではないのか」との声が出され、私たちは振り返りの議論を行い、「成果」ではなく「赤字だから仕方ない」という諦め感に自らが流されたことによる「敗北」とであると総括した。私たちはこの反省を踏まえ、夏季手当満額回答に向けて自らの要求とすべく各職場の青年部員と議論を行ってきた。最終的に 2. 0 ヶ月で妥結の判断をしたが、再申し入れのたたかいでは青年部員の声を集め、情報化し、青年部員の怒りや不満などを会社に訴えてきた。次なるたたかいを見据え、私たち青年部員の将来に極めて関係する雇用の確保・労働条件の向上に向けた議論を継続して行い、組織強化・拡大に向けさらに奮闘していかなければならない。

青年部の将来に関わる施策が矢継ぎ早に打ち出される中、横浜地本青年部は青年部員とともにつくり出す運動にこだわり、「施策に向き合う意見交換会」や「系統別意見交換会」に職場の仲間とともに参加し、青年部から会社や J R 東労組の今後、職場や働き方がどのように変化していくのか、施策にどのように向かっていくべきか議論を重ねてきた。施策に対して「白紙撤回」「反対」を叫ぶだけでは雇用や利益は守られない。安全・健康・ゆとり・働きがいのある施策とするために、今後も未来を先取りした議論を続けていく。一方で、そうした要求をかちとるには組織の力が必要不可欠である。青年部から今後も組織強化・拡大に向けた議論をつくり出していく。

新型コロナウイルス感染症の影響は学びの場にも大きく影を落としている。「J R 福知山線脱線事故現地踏査」や「ヒロシマ現地学習行動」も例外ではなく、2 年連続で現地へ赴くことを断念した。しかし、過去の記憶はそのままでは風化してしまう。横浜地本青年部はこの間、福知山線脱線事故の発生日に現地に行けない代わりに学習会を行ってきた。私たちは今後も、「現地に立つ」ことにこだわり「若者たちの沖縄平和研修」や「5・15 沖縄平和行進」などを通じて戦争や企業犯罪の本質と、民意を無視し続け弱き者を弾圧する現実を学んでいく。政治に無関心であっても無関係ではいられない。平和な社会の実現に向けて、組織の総団結を持って奮闘していく。

私たちは、「職場で不安に思う全ての仲間たちに寄り添う」という強い決意にたち、J R 東労組の強化・拡大を全青年部員と担うとともに、離脱者にも再結集を呼び掛けていく。将来を担う私たち青年部の未来を展望し、全青年部員で新生 J R 東労組運動を推し進めていこうではないか。

以上、宣言する。

2 0 2 1 年 9 月 2 6 日  
東日本旅客鉄道労働組合  
横浜地方本部青年部  
第 1 9 回定期委員会

**全ての仲間を置き去りにせず、新生 J R 東労組運動を推し進めよう！！**